

# 保育者養成における運動有能感と 領域「健康」の資質に関する研究

## Study on the Physical Competence and the Qualities of the Area “Health” in the Training of Childcare Practitioner

濱田 雄仁

Katsunori Hamada

### はじめに

幼児教育・保育施設では、「幼稚園教育要領」、「保育所保育指針」、「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の三法令で示されている5領域・10の姿に準じた保育計画が作成され、各幼児教育・保育施設の実態に応じて保育活動が行われている。その中で、子どもの運動や生活習慣などの心身の発達に関しては、領域「健康」で取り扱われている。領域「健康」では、「健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う」をねらいとしており、「(1) 明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わう」「(2) 自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする」「(3) 健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身に付け、見通しをもって行動する」と示されている<sup>1) 2) 3)</sup>。また、ねらいを達成するための内容として、からだを動かしての行動、排泄や睡眠、食事、清潔、衣服着脱などの生活習慣とそのリズム、安全な生活について自ら気づける子どもの育ちが取り上げられている(岡, 2018)。

これらのねらいや内容を展開していく中で、子どもの心身の発達を促す担い手として、幼児教育・保育施設で子どもと多くの時間をともに過ごす保育者の果たす役割は大きいと考えられる。領域「健康」に関して、吉田・杉原・森(2007)の幼稚園における運動指導の実態調査では、幼稚園では幼児の健康や体力づくりに高い関心をもつ一方で、運動指導は体育専門の指導者にまかせる傾向があったと報告されている。専門的な指導においては種目が限定されるなど、効果的とは言い難い方法であることも指摘されており、幼児期の発育発達を考えると保育のカリキュラムの中で多様な運動を経験することも不可欠であると考えられる。そのため、保育者は運動指導に対する知識や技能を身に付けていることが求められる。

保育者養成校における運動指導の資質の育成については、運動有能感に着目した研究が行われている。運動有能感は、自己の運動能力、運動技能に対する肯定的認知である「身体的有能さの認知」、

自己の努力や練習によって運動をどの程度コントロールできると認知しているかを示す「統制感」、運動場面で教師や仲間から受け入れられているという認知である「受容感」の三因子から構成される。保育学生を対象とした研究では、運動有能感と運動指導の自信や意識・主観的健康度との関連性を検討した報告(日比, 2019)や運動有能感と運動指導に関する心配に着目したグループ学習の効果を検証した報告(丸井・井邑, 2015)がある。運動指導の資質の育成に関して、保育学生の運動有能感は、さらなる検討が求められる要因であると考えられる。

また、領域「健康」に関しては、心身ともに健康な子どもを育むためのさまざまな保育行為に対する保育者の支援や実現の見通しを「健康」保育者効力感と定義し、その測定を試みた研究が報告されている。川畑(2020)や三宅・友川・友川・朝倉(2020)は保育士の勤続年数によって、「健康」保育者効力感に差があることや生活習慣と関わりがあることを明らかにしている。

「健康」保育者効力感は、保育者としての資質に影響する要因であると考えられるものの、あまり多くの研究が行われておらず、十分な検討がなされているとは言い難い。また、領域「健康」では子どもの身体活動に関わる内容が含まれるが、保育学生における運動指導の資質と関連していると考えられる運動有能感との関係について明らかにした研究は見当たらない。

そこで本研究では、運動有能感と「健康」保育者効力感の関係を検討することで、保育者養成における領域「健康」の資質を育むための一助となる知見を得ることを目的とした。

## 研究方法

### 調査時期および対象

2022年6月から7月にかけて、K県の専門学校保育者養成課程に在籍する学生および高等学校保育科に所属する生徒を対象として質問紙調査を実施した。分析対象は、欠損のある回答を除いた保育者養成課程学生39名と高等部保育科51名の計90名であった。また、本研究では社会人経験を有する学生は分析対象外とした。

なお、被験者は、自らの意思で調査への参加の有無を決定できること、調査へ協力することで不利益を被ることがないこと、収集されたデータは集団の平均値や標準偏差などを用いて分析を実施するため個人が特定されないことを調査用紙に明記した。

### 質問紙調査

**運動有能感** 岡沢・北・諏訪(1996)の運動有能感尺度<sup>4)</sup>を使用した。運動有能感は、下位尺度として「身体的有能さの認知」、「統制感」、「受容感」があり、3因子4項目からなる計12項目で構成される。表1に下位尺度および質問項目を示す。

各項目の回答は、「あてはまる(5点)」～「あてはまらない(1点)」の5件法で回答を求めた。各下位尺度の得点は20点満点であり、運動有能感の総得点は60点満点であった。分析には、運動有能感の総得点および各下位尺度の得点を用いた。

表1 運動有能感の下位尺度および質問項目

身体的有能さの認知	1	運動能力がすぐれていると思います
	2	たいていの運動は上手にできます
	8	運動の上手な見本として、よく選ばれます
	10	運動について自信をもっているほうです
統制感	3	練習をすれば、必ず技術や記録は伸びると思います
	4	努力さえすれば、たいていの運動は上手にできると思います
	11	少し難しい運動でも、努力すればできると思います
受容感	12	できない運動でも、あきらめないで練習すればできるようになると思います
	5	運動をしている時、先生が励ましたり応援してくれます
	6	運動をしている時、友達が励ましたり応援してくれます
	7	一緒に運動をしようと誘ってくれる友達がいます
	9	一緒に運動する友達がいます

「健康」保育者効力感 領域「健康」の資質を測定する指標として、田辺（2011）の「健康」保育者効力感尺度<sup>5)</sup>を使用した。この測定尺度は、全14項目から構成される。表2に質問項目を示す。

各項目の回答は、「非常に自信がある（7点）」～「全く自信がない（1点）」の7件法で回答を求めた。「健康」保育者効力感の総得点は98点満点であった。分析には、「健康」保育者効力感の総得点を用いた。

表2 「健康」保育者効力感の質問項目

1	子どもが十分に全身を動かし、活動意欲を満足させるように保育する
2	集団での生活で必要とされるきまりや約束の大切さに子どもが気づき、自ら守ろうとする態度を育む保育をする
3	子ども一人一人の生活のリズムを把握し、それらに応じながら、活動と休息の調和を図り保育する
4	子どもが危険な場所や危険な遊び方を理解し、安全に気をつけて行動できるように保育する
5	基本的な生活習慣を子ども自らが進んで行うように援助する
6	子どもが社会生活上の習慣や態度を身につけることができるように援助する
7	子どもが戸外で過ごすことの心地よさや楽しさを十分に味わえるように保育する
8	子どもが友達とかかわることで充実感や満足感を味わえるように保育する
9	子どもが交通安全の習慣や災害時の行動の仕方を理解し、身につけることができるように保育する
10	子どもの活動への取り組みの様子を見極め、必要に応じて子どもの意欲を喚起するように援助する
11	子どもの体調の変化に気を配り、問題のあった場合は適切に対処する
12	子どもが体を十分に動かし、進んで運動するように援助する
13	保護者に子どもが健康な生活のリズムを身に付けることの大切さを伝え、家庭での生活の仕方についての理解を促す
14	子どもが食にかかわる体験を積み、食に興味をもつように保育する

## 分析方法

対象を運動有能感の総得点および各下位尺度の総得点において、中央値より高い値を示した群を上位群、中央値より低い値を示した群を下位群として分類した。各分類において、中央値にあたるデータは分析対象から除外した。運動有能感および各下位尺度における上位群と下位群の2群間で「健康」保育者効力感の得点を比較した。

## 統計処理

運動有能感および下位尺度である「身体的有能さの認知」、「統制感」、「受容感」の3因子、「健康」保育者効力感について、各因子の信頼性を検討するためにCronbachの $\alpha$ 係数を算出し内的整合性を確認した。

「健康」保育者効力感の得点の比較は、Welchのt検定を行った。分析には、統計処理ソフトR version4.1.3を使用した。有意水準は5%とした。

## 結果

### 信頼性の検討

因子の信頼性を示すCronbachの $\alpha$ 係数は、運動有能感において $\alpha = .94$ であり、内的整合性を備えているといえる。身体的有能さの認知は $\alpha = .94$ 、統制感は $\alpha = .93$ 、受容感は $\alpha = .82$ であり、各因子内の項目の内的整合性を備えているといえる。

また、「健康」保育者効力感については、 $\alpha = .98$ であり、内的整合性を備えているといえる。

### 運動有能感と「健康」保育者効力感の関係

表3に運動有能感および「身体的有能さの認知」、「統制感」、「受容感」における上位群と下位群の2群間で「健康」保育者効力感の総得点を比較した結果を示す。

運動有能感においては、下位群より上位群の得点が有意に高値を示した ( $p < .01$ )。

「身体的有能さの認知」においては、下位群より上位群の得点が有意に高値を示した ( $p < .05$ )。「統制感」においては、下位群より上位群の得点が有意に高値を示した ( $p < .01$ )。「受容感」におい

表3 運動有能感と「健康」保育者効力感の関係

	下位群			上位群			t 値
	n	mean	± sd	n	mean	± sd	
運動有能感	44	68.82	± 17.27	42	79.74	± 12.22	3.40 **
身体的有能さの認知	40	70.40	± 18.06	39	77.67	± 12.54	2.08 *
統制感	45	69.33	± 17.59	45	79.02	± 11.96	3.06 **
受容感	44	67.27	± 15.67	35	82.46	± 11.29	5.00 ***

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$

ては、下位群より上位群の得点が有意に高値を示した ( $p < .001$ )。

## 考 察

運動有能感の上位群では、下位群と比較して「健康」保育者効力感の得点が有意に高値を示したことより、運動有能感と「健康」保育者効力感に関係があることが示唆された。領域「健康」においては、身体活動に関連する内容が取り扱われていることから、運動有能感が高い保育学生は、「健康」保育者効力感が高い傾向にあったと推察される。また、保育者は幼児が身体活動を行う際に、運動能力の向上や生活リズムの改善を促すことを意識していると報告されている（田中, 2010）。保育学生においても、保育における身体活動は生活習慣に関連しているという認識がある可能性が考えられることから、運動有能感と「健康」保育者効力感が関係していることが示された要因であると考えられる。しかしながら、本研究では食や生活習慣の指導や援助に対する運動有能感の影響については、明らかにしていない。今後さらなる検討が求められる。

「身体的有能さの認知」の上位群では、下位群と比較して「健康」保育者効力感の得点が有意に高値を示した。運動技能に対する肯定的な認知が高い学生は、身体活動を伴う保育場面の技能についても肯定的に捉えており、活動意欲を満たすことや体を適切に動かすことの指導や援助に対する自信があることが推察される。吉田・岩崎（2014）は、養成段階でよく学んでいる幼稚園教諭は技術指導志向が高く、幼児期の運動発達の特徴を考えると矛盾していることを指摘している。保育者養成校では、保育学生の運動能力や運動技能の習得を目指した指導や子どもの運動技術指導に偏重した学習内容ではなく、保育学生が運動の楽しさを味わいながら活動していく過程で、段階的に運動能力や運動技能を身に付けることができるようにする授業を展開していく必要があると考えられる。

「統制感」の得点の上位群では、下位群よりも「健康」保育者効力感の得点が有意に高値を示した。努力することで運動ができるようになるという認識を示す統制感、子どもとの関わりにおいても、十分に体を動かすための援助や意欲を促すような関わりができるという自信に繋がっていることが推察される。子どもへの肯定的な援助ができるような資質を育むために、保育学生が多様な運動経験をj得て、運動が上達する過程や目標を達成する経験を味わわせることが必要であると考えられる。

受容感の上位群では、下位群よりも「健康」保育者効力感の得点が有意に高かった。運動場面で教師や仲間から自分が受け入れられているという認識は、子どもが進んで運動を行うように促すことや運動の満足感を与えることができるような保育ができるという自信に影響していると考えられる。運動有能感の発達傾向に関して、受容感は中学生から高校生の段階で低下することが報告されている<sup>4)</sup>。受容感が「健康」保育者効力感と一定の関係があることを鑑みると保育者養成校の体育授業では、保育学生の受容感の向上を図った指導が必要であると考えられる。

本研究では、運動有能感および下位尺度である「身体的有能さの認知」、「統制感」、「受容感」において、上位群では下位群と比較して「健康」保育者効力感が高かった。領域「健康」で取り扱われている食や生活リズムに関する項目との関係については検討の余地が残されたものの、保育学生

において運動有能感は「健康」保育者効力感と一定の関係があることが示唆された。また、運動有能感を総合的に高めていくことは、「健康」保育者効力感を向上させる可能性があると考えられる。保育者養成においては、体育授業を中心として、学生の運動有能感を高めることが領域「健康」の資質を高める一助となると考えられる。今後は、保育者養成校の体育授業や身体活動を伴う活動による運動有能感と「健康」保育者効力感の変化について検討することで、保育者養成における領域「健康」の資質の育成に寄与する知見を得ることが求められる。

## 結 論

本研究の目的は、運動有能感と「健康」保育者効力感の関係を検討することで、保育者養成における領域「健康」の資質を育むための一助となる知見を得ることであった。

運動有能感および下位尺度である「身体的有能さの認知」、「統制感」、「受容感」のそれぞれで上位群、下位群の「健康」保育者効力感の総得点を比較した結果、運動有能感および各下位尺度において、上位群では下位群よりも「健康」保育者効力感が高いことが明らかとなった。保育者養成において、体育授業を中心に学生の運動有能感を高めていくことが領域「健康」の資質を高めるための一助になり得ると考えられる。

## 引用文献

- 1) 文部科学省 (2017) 幼稚園教育要領.
- 2) 厚生労働省 (2017) 保育所保育指針.
- 3) 内閣府・文部科学省・厚生労働省 (2017) 幼保連携型認定こども園教育・保育要領.
- 4) 岡沢祥訓・北 真佐美・諏訪祐一郎 (1996) 運動有能感の構造とその発達及び性差に関する研究. *スポーツ教育学研究*, 16 (2), 144-155.
- 5) 田辺晶吾 (2011) 心身ともに健康な子どもを育むための保育者の資質について - 「健康」保育者効力感からの検討 -. *四天王寺大学紀要*, 51, 175-185.

## 参考文献

- 日比健人 (2019) 保育者志望学生の運動有能感と運動指導への自信や意識・主観的健康度との関連性について. *夙川学院短期大学研究紀要*, 46 (46), 37-48.
- 川畑和也 (2020) 保育者養成課程学生の資質に関する一考察 - 領域「健康」に着目して -. *豊岡短期大学論集*, 16, 131-138.
- 丸井一誠・井邑智哉 (2015) 女子短大生における幼児への運動遊びの指導に関するグループ学習の効果 - 運動有能感と心配に着目して -. *金沢星稜大学人間科学研究*, 9 (1), 31-34.
- 三宅公洋・友川 幸・友川 礼・朝倉隆司 (2020) 保育者の健康に関する活動の自己評価及び「健康」保育者効力



感とそれらに関連する要因の検討. *日本健康教育学会誌*, 28 (4), 287-298.

岡 みゆき (2018) 領域「健康」のねらいと内容の考え方. 前橋 明 (編), *コンパス保育内容健康*: 建帛社.

田中沙織 (2010) 幼児の身体活動に対する保育者の意識に関する研究. *広島大学大学院教育学研究科紀要第三部*, 59, 161-166.

吉田伊津美・杉原 隆・森 司朗 (2007) 幼稚園における健康・体力づくりの意識と運動指導の実態. *東京学芸大学紀要総合教育科学系*, 58, 75-80.

吉田伊津美・岩崎洋子 (2014) 園での運動遊び指導と運動遊び指導に対する幼稚園教諭の認識－園での運動遊び指導に対する満足度と技術指導志向からの検討－. *発育発達研究*, 64, 18-24.

